

【第 55 回研究例会】

エリザベス・デイヴィス氏を迎えて

【目次】

コロンビア大学音楽芸術図書館 -- 研究大学における
専門図書館の役割 (講演)

	エリザベス・デイヴィス	
研究例会傍聴記	山田 芳	5
報告・国際会議 "Keeping Music Alive" (Soul)		
	長谷川 由美子	8
アントワープ国際大会プログラム		13

第 55 回研究例会 (講演)
2013 年 11 月 30 日

The Columbia University Music & Arts Library :
A Branch Library in a Research University En-
vironment

Elizabeth Davis

コロンビア大学音楽芸術図書館 研究大学における専門図書館の役割

エリザベス・デイヴィス
(コロンビア大学音楽芸術図書館長)
山田晴通訳

コロンビア大学音楽芸術図書館¹⁾は、コロ
ンビア大学において図書館システムを構成す
る 19 館のひとつです。この図書館は、その

主だった利用者が集まる音楽部門、芸術学校
と同じ建物に入っています²⁾。床面積はおよ
そ 12,000 平方フィート (1,115 平方メート
ル、337 坪) を占め、書架、個人用・グルー
プ用の読書席、セミナー室、音響映像再生装
置類、コンピュータ端末コーナー、デジタル
音楽ラボを備えています。開架の貸し出し資
料は、楽譜と書籍がおおよそ 65,000 点、CD
が 25,000 点、映像資料類が 2,000 点ほどあ
ります。特殊コレクションには、数百冊の初
期の印刷出版物や楽譜類があり、デジタル音
源のライブラリも構築しています。

こうしたコレクションは、当館が所蔵する
蔵書の半分ほどに過ぎません。残りの蔵書は、
コロンビア大学から離れた場所で、プリンス
トン大学、ニューヨーク公共図書館システム
と共同で運営しているニュージャージー州
プリンストンの書庫に保管されています³⁾。そ
こには、3 つの図書館の 500 万点に及ぶ資料
が収蔵されています。

音楽芸術図書館は、コロンビア大学関係者
以外にも公開された施設です。常勤職員は 3
名で、参考業務、利用者への指導、大学中央
図書館の技術処理部門から回されてくる資料
の受付、すなわち、受け入れ処理、目録作成、
保存などを職務としています。常勤職員の仕
事は、年間延べ 3,500 時間ほどの学生アル
バイトによって補助されています。



エリザベス・デイヴィス氏

特別コレクションとして所蔵されている印刷物には、書籍と楽譜があります。1975 年、RISM の最初のレポートに、当館は 1800 年以前に発行された 140 冊の書籍と 600 点の楽譜を報告しました。特別コレクションの書籍には、1573 年にヴェネチアで出版されたジョゼッフォ・ツァルリーノの『ハルモニア教程 (*Istitvioni harmoniche del rev. messere Gioseffo Zarlino*)』などが含まれています。楽譜の中には、ベラ・バルトークが自ら録音、採譜したセルボ＝クロアチア民謡などがあります。しかし、当館にはアーカイブの紙の現物はありません。収蔵スペースの制約から、1982 年にすべての紙のアーカイブは稀覯書・手稿図書館 (the Rare Book and Manuscript Library) に移管されました。

当館が所蔵する特別コレクションの音源には、Creative Music Studio (CMS)⁴⁾ から移管された 500 本の録音テープも含まれています。CMS は、1971 年にカール・バーガー、イングリッド・セルツォ、オーネット・コールマンが創設した組織です。ニューヨーク州ウッドストックに拠点を置いていた CMS は、世界中から集まった音楽家たちが住み、音楽を制作し、交流して、即興演奏とジャズのレ

パートリーに重点を置きながら、様々なジャンルで音楽を生み出しました。モノとしてのオリジナルの録音テープに加え、これを複製したデジタル・オーディオ・コピーとして、24 ビット 96kHz Broadcast Wave File、利用者用に提供するコピー CD、最終的にはインターネット経由のアクセスも考慮した MP3 ファイルなどが用意されています。

音楽芸術図書館のデジタル音楽ラボ (Digital Music Lab)⁵⁾ は、音楽制作に特化したソフトウェア、ハードウェアを用意して、ほとんどのフォーマットによるデジタル音源、デジタル楽譜に関する作業をサポートしています。このラボは、コンピュータ音楽センター (the Computer Music Center)⁶⁾ の仕事をサポートするとともに、大学図書館群の中にある 3 か処のデジタル・センターに協力する機能を持っており、特にデジタル人文学センター (the Digital Humanities Center)⁷⁾ との結びつきが強くなっています。ちなみに、あとふたつのセンターは、デジタル社会科学センター (the Digital Social Sciences Center) とデジタル科学センター (the Digital Sciences Center) です。

大学の稀覯書・手稿図書館⁸⁾ が所有する音楽関係の資料の中には、コロンビア大学と縁のあった作曲家たちの手元にあった書類や手稿が含まれており、その中には、音楽部門の初代部門長だったエドワード・マクダウェル (Edward MacDowell, 1860-1908) に関するものもあります。また、オペラ作曲家であり、音楽書の著者としても知られ、1940 年から 1962 年まで音楽部門の部門長を務めたダグラス・ムーア (Douglas Moore, 1893-1969) のものもあります。

大学内の別の図書館である C.V. スター東ア

ジア図書館 (the C.V. Starr East Asian Library)⁹⁾ も、音楽に関する希少な印刷資料を所蔵しています。この中には、1889年に東京で出版された『三都声曲類纂』などもあります。これは多数の冊子からなる浄瑠璃の集成です^{訳注)}。

資料の収集や提供に加え、音楽芸術図書館は、コロンビア大学内の諸部門とも協力して、教育研究活動の支援を行なっています。その一例に、コロンビア大学ジャズ研究センター (the Center for Jazz Studies at Columbia)¹⁰⁾ があります。ジャズ研究センターは、メロン財団 (the Mellon Foundation) から数種類の資金援助を受け、ジャズ録音のオンライン・ディスコグラフィ J-DISC¹¹⁾ の構築に取り組んでいます。ここでも当館の職員は、ウェブサイトの構造やデザインについて利用者がどのようなニーズを持っているか、また、用語法や演奏者や作曲家の氏名のデータベース化、標準的なカタログ作成基準などの問題についても助言をしています。

多様な情報へのニーズに応え、当館は多数のデータベースと利用契約を結んでいます。その中には、*Index to Printed Music (or IPM)* や *Music Scores online* のような楽譜のデータベースも含まれています。録音関係では、アレクサンダー・ストリート・プレス (Alexander Street Press) の音楽関係のデータベース群、*Music Online*, *American song*, *Contemporary world music*, etc. や、クラシック音楽やジャズに関するナクソスのデータベース (*the Naxos databases*)、また *Database of Recorded American Music (DRAM)* などが利用できるようになっています。最近では、ビデオ素材を扱うもの、*medici.tv*, *Opera in video*, *Ethnographic video online* などがあり、つい先月にも、ニューヨークのメトロポリタン歌劇場のオペラの映像を提供する *Met Opera on*

Demand の利用権が新たに当館へ無償提供されることになりました。

コロンビア大学図書館群における最近の取り組みのひとつに、アカデミック・コモンズ (the Academic Commons)¹²⁾ の形成があります。コロンビア大学の関係者は、学術的ないし創造的業績をそこに蓄積していくことができます。例えば、博士課程の学生の論文がポストされていきます。アカデミック・コモンズに蓄積されたコンテンツは、インターネットを介して、広く無料で利用可能です。

音楽芸術図書館は、コロンビア大学図書館群が取り組む様々な他の組織との提携に積極的に参加し、提携関係を築いています。その一例として、アイヴィー・リーグの7大学の図書館で構成している直接貸出 (Borrow Direct)¹³⁾ があります。完全にオンライン化された手続きによって、各大学の教員、学生、職員は、書籍、楽譜、録音物へのリクエストを、提携している各大学の図書館群、すなわち、ブラウン大学、コーネル大学、ダートマス大学、ハーバード大学、マサチューセッツ工科大学、イェール大学の図書館に出すことができるのです。リクエストされた資料は、3日から5日で取り寄せられることとなります。

これら各大学の音楽関係図書館は、協議を通して、この基本的な合意をさらに発展させ、20世紀および21世紀の作曲家2,500人を選んで共同コレクションを構築していくことに合意しています。対象となる作曲家たちの多くは、将来が期待される若手であり、まだ余り知られておらず、多くが関係各大学で教鞭を執っています。各図書館は、それぞれ多数の作曲家を選んだ上で、その出版・公表されたすべての作品の楽譜と音源を購入することに合意しています。利用者は、自分の大学の

図書館にない楽譜も、他大学の提携先へ容易に楽譜のリクエストが出せますので、こうしてコレクションの重複を避けることで、全体としてより多くの種類の楽譜を購入することができ、作曲家たちを支援できるようにしているのです。

さて、私のコロンビア大学におけるライブラリアンとしての勤務年数は、今や 25 年となりました。この間、私はアメリカ合衆国の研究専門図書館における大きな変化を見てきましたが、それは私自身のミュージック・ライブラリアンとしての仕事にも大きな影響を及ぼしてきました。

コレクション中心の環境から、サービス中心の環境へ。特別コレクションは今も積極的に追究されていますが、今やその目的は、私たちの図書館を利用する学生や教員が、教育や研究においてそれを活用するところにあります。通常の資料に関しては、コレクションを構築することより、広くコレクションを共有することへと力点の置かれ方が変わってきました。

受動的なコレクションの配架と読書席の用意から、ラボやワークショップを備え、新たなデジタル技術も取り込んだ、能動的な学習センターへ

文献指導の授業と、固定された参考係（レファレンス・デスク）の対応時間から、すべてのレベルの利用者に 1 対 1 で対応する参考業務へ。

閉じられた、出版物中心の環境から、オープン・アクセスの、誰もが無料で情報を享受できるようにする、図書館が主体となった出版・公表プログラムへ。

個々の利用者の読書席が中心であった物理

的空間から、WiFi 環境のある共同作業用にデザインされた席や机へ。

厳格な官僚機構のような組織から、ライブラリアンが、技術者やマーケティング／広報専門家、評価専門家、その他と肩を並べて共同作業ができる、よりプロフェッショナル（職能的）な構造へ。

排除的、局地的な観点から、提携中心のグローバルな観点へ。

【註】

- 1) <http://library.columbia.edu/locations/music.html>
- 2) <http://music.columbia.edu/>
- 3) <http://library.columbia.edu/find/request/off-site.html>
- 4) <http://www.creativemusicstudio.org/>
- 5) http://library.columbia.edu/locations/music/music_lab.html
- 6) <http://music.columbia.edu/cmc/>
- 7) <http://library.columbia.edu/locations/dhc.html>
- 8) <http://library.columbia.edu/locations/rbml.html>
- 9) <http://library.columbia.edu/locations/eastasian.html>
- 10) <http://jazz.columbia.edu/>
- 11) <http://jdisc.columbia.edu/>
- 12) <http://academiccommons.columbia.edu/>
- 13) <http://library.columbia.edu/find/request/borrow-direct.html>

【訳注】

『三都声曲類纂』は、宮（上下）・商・角・徴（ち）・羽（う）から成る、一般的には、浄瑠璃の歴史書と説明される文献。

【第55回 IAML 日本支部研究例会傍聴記】

エリザベス・デイヴィス氏講演「コロンビア音楽芸術図書館 — 研究大学における専門図書館の役割」について

山田 芳

今回の例会は、コロンビア大学ウィーナー音楽芸術図書館長のエリザベス・デイヴィス氏をゲストにお招きし、「研究大学における音楽図書館の役割について」というテーマでご講演いただいた。当日は IAML 会員のほか、会場校である東京音楽大学の職員や卒業生も含めた計 17 名が参加した。

講演者のエリザベス・デイヴィス氏は、インディアナ大学ブルーミントン校において図書館学、ニューヨーク大学において音楽学を修め、テンペル大学図書館、W. W. ノートン社、セント・ジョーンズ大学図書館、ピアポント・モーガン図書館でのキャリアを経て、現在はコロンビア大学ウィーナー音楽芸術図書館（以下、音楽芸術図書館）の館長を 25 年間にわたって務めておられる。

今回の講演は、大学付属の音楽図書館にはどのような役割が期待されるのか、また音楽図書館で働く職員はどのように自分の力を発揮すべきなのか、図書館職員になって日の浅い筆者にとっては新たな視点を得る貴重な機会となった。音楽図書館の一職員として特に印象に残った点を取り上げながら、今回の講演を振り返ってみたいと思う。

☆

デイヴィス氏が館長を務める音楽芸術図書館は、ニューヨーク州コロンビア大学の図書館システムを構成する 19 館のうちの一つである。大学の音楽部門と同じ建物にあり、約 12,000 平方フィート（約 1,100 平方メートル）

の敷地に、個人用・グループ用読書席、セミナー室、AV 再生装置、PC コーナー、デジタル・ミュージック・ラボなどの設備を有し、書籍・楽譜約 60,000 点、CD 約 22,000 点、映像資料約 1,600 点を開架している。この数字を見る限りは決して大規模な図書館とはいえないものの、学内外の諸機関との様々な連携（コラボレーション）によって、多様な図書館サービスを実現している点が興味深かった。

まず、音楽芸術図書館の館内には、上記の開架資料を含めて蔵書全体のおよそ半分しか置かれていない。残り半分の資料は、コロンビア大学、プリンストン大学、ニューヨーク公共図書館の 3 機関が共同運営する、ニュージャージー州プリンストンの書庫（ReCAP）に収蔵されている。保存書庫の設置といえば、日本でもアメリカの例に倣っていくつかの大学で試みられているが、いずれも各大学が単独で行なっている事業である。大学図書館のみならず、館種の異なる私立図書館とも協力するこの試みは、今後日本の図書館でも参考にしていきたい点の一つである。

また、音楽芸術図書館では、初期印刷出版物や楽譜類、またクリエイティブ・ミュージック・スタジオ（CMS）など外部機関から移管された音源などを収めた、貴重資料の特別コレクションを所蔵している。貴重資料の紙



会場風景（東京音楽大学）

のアーカイブは、収蔵スペースの都合から現れており、音源については、オリジナル（テープ）を保管するだけでなく、デジタル・オーディオ・コピー（24bit/96kHz, BWF 形式）を作成して利用者に提供するための CD に焼き直し、将来的にインターネットでの提供も考慮に入れて MP3 ファイルへの変換も行なっている。こうした動きは学内の他機関の所蔵資料にも及び、例えばコロンビア大学コンピュータ音楽センター所蔵の録音テープは、数年前に音楽芸術図書館へ移管され、録音物収集協会（ARSLC）やニューヨーク州図書館研究資料保存保全計画からの資金によって音源の保存とデジタル化が行なわれた。音楽図書館が主体となって学内外の貴重資料を積極的に収集し、適切な方法で保存する一方で、利用者の利便性にも配慮して様々な媒体で資料が提供されているのは、学生や研究者にとってはとても魅力的な環境であろう。

☆☆

音楽芸術図書館では、図書館本来の仕事である資料の収集・利用・保存を行なう一方で、学内の教育・研究活動を図書館ならではの機能を使ってサポートしている。例えば、デジタル・コンテンツの制作に関して、館内にデジタル・ミュージック・ラボ（DML）という音楽制作に特化したソフトウェアおよびハードウェアを備えた施設を構えており、ほとんどのフォーマットによるデジタル音源・デジタル画像に関する作業はここで行なうことができる。このラボは、先述のコンピュータ音楽センターの業務をサポートするとともに、コロンビア大学図書館群に属する 30 のデジタルセンターに協力する機能を併せ持っており、特にデジタル人文学センターとの結びつきが強い。

その一例に、マレンツィオ・プログラムと

いうプロジェクトがある。このプロジェクトでは、16 世紀の作曲家ルカ・マレンツィオの作品について、最初から全面的にデジタルで作成されたエディション（デジタル・エディション）を制作するという取り組みを行なっている。大学の音楽部長を含むプロジェクト・ディレクターに協力する形で、音楽芸術図書館の職員がウェブサイトの構造やデザインについて図書館利用者がどのようなニーズを持っているか助言し、集団での編集作業に使用するソフトウェアの準備などにも取り組んでいる。また、マレンツィオ作品を世界中から収集して、デジタル化する作業も行なっている。

また、多様な情報へのアクセスを求める利用者に対応して、楽譜や録音、映像など様々なコンテンツを収蔵するデータベースと契約している。契約データベースに関しては予算が気にかかるところだが、デイヴィス氏曰く「基本的には今後さらにデジタル化を進める方向で考えていて、デジタル素材で利用可能なものは全てデジタルを優先する予定である。ただし、音楽を含めた人文科学系の学問では、紙媒体の需要がいまだに多いため、紙に対する予算配分の確保も重要である。データベースに関しては大学全体で予算が決まっているので、各部門が折衝して勝ち取ってくる。音楽芸術図書館の場合、年間 40 万ドル程度の予算を取っており、幸い館長歴 25 年間でほとんど減らずに推移している」とのことである。

また、コロンビア大学図書館群の近年の取り組みに、研究者の業績を蓄積、公開するアカデミック・コモンズというプロジェクトがある。いわゆる機関リポジトリのようなものと思われるが、アカデミック・コモンズに登録されたコンテンツはインターネットを介

して広く公開され、誰もが無料でアクセスすることができる。これにより、研究者にとっては、従来のように出版社と契約して著作権、公表権を譲り渡すという方法を取ることなく、論文など業績を外部へ公表できるというメリットがある。

☆☆☆

学外機関との共同事業については冒頭の保存書庫の件でも触れたが、紹介された数々の事例の中でおそらく最も参加者の関心を引いたのは、20世紀～21世紀の作曲家・約2500名の作品を収集する共同コレクション事業であろう。このプロジェクトでは、参加大学がそれぞれの大学でどの作曲家の作品をコレクションするか分担を決め、収集作業にあたっている。収集した作曲家名と大学名はウェブサイトには細かくリストアップされており、利用者は自分の大学にない作品を所蔵大学から取り寄せることができる。一つの図書館で網羅的にコレクションを揃えることは、スペースや予算の都合上での限界があるが、複数の図書館でコレクションを共有することに主眼を置けば、大学間でコレクションの重複を避けることができるだけでなく、全体として現代の作曲家の作品を網羅的に幅広く収集することができる。



デイヴィス氏と山田晴通氏（懇親会場にて）

この事例でもう一つ興味深いのは、この共同コレクション事業をコロンビア大学当局に提案し、メロン財団の資金で運営されている学内のウェブ・リソース・コレクティブ・プログラムの一枠に参画させた点である。個人的には、このように図書館が自ら大学側へ働きかけ、様々な方法で説得し、必要な財源や環境を勝ち取ってくる力、つまり「自己アピール力」を持っているかどうか、今後の日本の図書館員にも必要とされる資質であるように感じた。

「研究大学における音楽図書館の役割」が今回のテーマであったが、役割とは、時代の流れに合わせて刻々と変化していくものである。図書館が図書館らしくありながら、尚且つその変化に対応していくにはどうしたら良いか。音楽資料を扱うプロフェッショナルとして様々な現場で働き、館長として大学図書館のマネジメントに長年携わってこられたデイヴィス氏のお話は、様々な点において示唆に富む内容であった。

（やまだ かおり 東京音楽大学附属図書館）

JCPO ワークショップ「日本の出版楽譜一目録作成を中心として」

3月26日（水）、東京音楽大学附属図書館において開催されたJCPO（次世代コンテンツ推進機構）ワークショップは、日本の戦前期刊行楽譜の目録実習を中心に開催された（プログラムは前号既報の通り）。受講者23名。実習は、東京音大所蔵の楽譜を各自手にとって目録を作成するというもの。対象が稀少資料ということもあって目録作成に熱心に取り組む風景がみられた。実習後の質疑応答では、国内版楽譜の特殊性（版・刷）や楽譜固有の項目（楽譜種別・編成・記譜）の理解、注記記述などについて意見が交され、楽譜目録作成への関心の高さをうかがわせた。

【国際会議報告】

Keeping Music Alive Innovative Approaches to Music Documentation and Interpretation (Nov. 8-9, 2013 in Seoul)

長谷川 由美子

昨秋、“Keeping Music Alive: Innovative Approaches to Music Documentation and Interpretation”と題する国際会議が、韓国の首都ソウルにある梨花女子大学音楽研究所で開かれた。このレポートは会議に参加した筆者の発表を中心に、他の発表に逐次触れ、会場の雰囲気やエクスカッションで出会ったことにも言及しながらまとめたものである。

会場となった梨花女子大学はプロテスタント系の有名女子大学で、ソウルの北西に位置している。丘全体が大学の敷地で、交通の便もよく、開放的な校内は観光客でにぎわっていた。

会議は11月8日（金）、11月9日（土）の2日間にわたって非常にタイトなスケジュールで行なわれた。発表者は事前に完全原稿を送付することを求められたが、会議ではその英語原稿と並んで韓国語訳の2か国語によるテキストが配られた。

初日は梨花大学音楽学部の教員と学生による伝統音楽と現代の合唱曲のコンサートで幕が開き、5つの大きなテーマのもとに、各20分間づつ23人の発表が始まった。

8日の第1セッションは“Music Databases and Archives: Past, Present, and Future”と題され、IAMLの組織であるRISM、RILM、IAMLと上海音楽学院の特別コレクション（著名な中国人作曲家の自筆譜や筆写譜）のデジ

タル化についてであった。

第2セッション “Practical Issues: Conservations with Musical Sources” の最初は細川周平氏による「国立国会図書館の近代デジタルライブラリーと近代日本音楽研究」だったが、話の中心は「鉄道唱歌と韓国への普及」であった。細川氏が壇上で鉄道唱歌を歌い始めると、驚いたことにかなりの人がそれに唱和した。それほど、この旋律は韓国でも知られているということを筆者は初めて知った。「鉄道唱歌」の作り方を真似た、つまり沿線の地理を織り込みながら、詞が進行するという唱歌が韓国でも作られたのだという。次の発表は図書館員と学生にとってのRISM、3番目は上海市立図書館所蔵の20万点に達するグラモフォン・レコードの保存、カタログ化、デジタル化、資料提供であった。4番目は作曲家名不明の楽譜を、RISM データを使用して真正な作曲家にたどり着くという、筆者にとって非常に興味深い演題であった。この日の最後の発表は梨花女子大学音楽学部で進行中の2011年秋から始まった「梨花女子大学音楽研究所データベース」であった。これは西洋音楽導入後の東アジア第一次資料のデータベース・プロジェクトで、今年の秋まで続く。

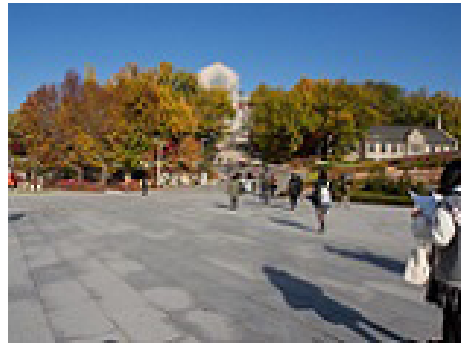
長い会議から解放された夜、参加者一同は韓国レストランに繰り出して、日本の鍋料理にそっくりな夕食に舌鼓をうった。辛い食物を用心深く避けたのは言うまでもない。

9日（土）の2日目は “Technical Issues: Music Databases in a Changing Technological Environment” と題するセッションから始まった。まず、国立台湾大学で行なわれている新聞（台湾日日新報）とSPレコードのデータベース化についてであった。このデータベースは台湾音楽のみならず近代アジアにおける

音楽史研究に大きな影響力を持つことが強調された。2 番目の発表はデンマークの王立図書館内に設けられたデーマーク音楽出版物センターが開発した Music Encoding Initiative (MEI) システムによって作成された主題目録や作曲家の全集についてであった。成果の一つはカール・ニールセンの主題目録で、彼の全集が、2015 年にはネット上からダウンロードできる。[\(http://www.kb.dk/en/kb/nb/mta/cnu/\)](http://www.kb.dk/en/kb/nb/mta/cnu/) J.P.E. ハルトマン、A. シャイベ、ニールス・ガーデの目録も計画中である。

3 番目の発表は筆者の苦手なコンピュータ言語を駆使したネット上における楽譜検索の可能性に関する発表だったが、おそらく日本語で聞いても理解の範囲を超えていただろう。次はバイエルン国立図書館における音楽学者を対象としたサービスについてで、その内容は、1. 音楽資料のデジタル化と提供、2. RISM オパックの提供、3. 「音楽学ヴァーチャル図書館」の開設である。一つの検索エンジンの使用によって書誌データやテキストのフルデータ、音楽学の専門家への情報が見いせるといふ。<https://www.vifamusik.de/home.html?L=1>

次のセッションは“Case Studies: Renewing the Contents of Texts”で、北京中央音楽学院教授の個人コレクション紹介から始まった。中国では組織的な文献探索が時として難しいという導入に続いて、教授の著作である『中国現代音楽』の基となった一次資料（手紙やインタビュー等）の紹介であった。次は梨花女子大学音楽学部図書館の概要について、現場の図書館員からの説明であった。3 番目の発表は安田寛氏で、グーグルブックがいかに歴史音楽研究を変えたかを、ご自身の著書『バイエルの謎：日本文化になったピアノ教則本』執筆の過程で遭遇したグーグルでの探索を中



梨花女子大学（ソウル）

心に話された。ユーモアたっぷりの話術は会場を大いに沸かせた。4 番目は梨花女子大学が現在取り組んでいる韓国で作られた曲を収集し、デジタル情報に変換して広く研究者に提供するプロジェクトの報告だった。例に出された Bongseonhwa (Garden Balsam) [ホウセンカの庭] は最初の韓国の芸術歌曲である。その詞や作曲者、編曲等のさまざまな情報やこの曲が愛国歌に変わっていった経緯が紹介された。愛国歌に変わったきっかけは日本の武蔵野音楽大学に留学していた韓国人歌手が日比谷公会堂で歌った時だったという発表には興味をそそられた。最後が筆者の発表だが、後述する。

コーヒープレイクを挟んだ最後のセッションは“New Directions: Innovative Approaches and New Interpretations”で、最初は台湾で非常にポピュラーな歌がどのような歌詞で誰によって歌われて音源として残っているかを追跡していく発表であったが、その中で日本の台湾統治時代に作成された日本の歌手や日本のレコード会社による音源の存在に驚きを禁じ得なかった。次は韓国における音楽資料収集の実態における発表であった。韓国では音楽資料が体系的に収集、保存、提供がなされてきたとはいえないが、梨花女子大学の取り

組んでいるプロジェクトや「韓国 SP レコード」プロジェクトによって状況が変化していることが報告された。この発表においても西洋音楽の輸入はアメリカの讃美歌と並んで日本統治だとの発言に、筆者は今まで気づかなかった日本の影響の大きさを感じないわけにはいかなかった。三番目の発表は大英図書館が公開しているオンラインによるコンサートプログラムの紹介だった。セッション最後は H. ゴチェフスキー氏によるフランツ・エッケルトに焦点をあてた発表であった。日本や韓国におけるエッケルトの位置に言及した後、当地の新聞や旅行記、外交文書、日記、手紙等の資料を使うことによって東アジアにおける外国人社会のネットワーク再構築に焦点をあてて発表を閉じた。

慣れない英語での会議から解放されたその日のディナーは大学構内に outlet している高級中国料理店で宮廷料理だった。

翌日のエクスカージョンは大型バスを仕立てて、ソウルとその近郊における音楽関係施設を訪ねるツアーだった。午前中に訪れたメソジスト教会は非常に印象的だった。広い会場を埋め尽くす信者たちとフル・オーケストラ、フル・コーラスによる讃美歌の演奏、歌詞と楽譜はコンピュータを通して会場前の幕に映し出されるというハイテクさ。毎週この形のミサが行なわれるという。コーラスやオーケストラの演奏能力は高く（プロではない）、韓国の音楽文化の層の厚さを感じた。オシャレなレストランでイタリアンを楽しみ、次の施設に行く途中で遭遇した大規模デモも忘れられない。団塊世代にとってはまさに青春時代を彷彿とさせる光景だった。最後はソウル郊外に位置する韓国初の長老教会の見学だった。山の中腹にへばりつくように建

てられた韓国風建物の教会からは最初の布教の困難さが伝わってきた。夕食は韓国風焼き肉レストランで、高級焼肉を楽しんだ。

東アジアということ意識させられる会議だった。参加者も開催国の韓国はもとより、日本、中国、台湾に及び、その発表のいくつか、2 か国にまたがる音楽資料についてであった。各国のデータベース化の動きや、それぞれの国の固有の音楽資料を保存しようとする潮流を、身をもって体験した。

会議の運営は非常に組織的であった。会議は韓国政府の補助金によって運営されたが、発表者はすべて招聘で、運賃、宿泊所とも梨花女子大学から提供された。国家予算の中で文化関係が日本とは比べられないほど大きな比重を占める韓国ではあるが、多くの外国人を招いて会議を開催する力が韓国にあることを見せつけられた思いだった。スタッフとして参加した大学院生、大学生共に機器の扱いに優れ、英語能力は高く、細やかな神経の行き届いたもてなしを受けた。11 月のソウルは非常に寒く、震え上がったが、心は温かい思いで満たされて帰途についた。

以下に筆者の発表を記す。

国立音楽大学附属図書館所蔵の自筆譜、筆写譜、19 世紀以前の貴重楽譜

はじめに

国立音楽大学は 1926 年に設立され、1950 年に大学になった比較的若い音楽大学である。その図書館は音楽関係蔵書数では日本一を誇っているが、蔵書が飛躍的に増大したのは 1968 年に大学院が出来た時である。当時の日本の音楽研究の中心は自国の音楽でもアジアの音楽でもなく、西洋音楽だった。その西洋音楽を研究する上で欠くべからざる

資料を、ドイツやフランスの留学から帰ったばかりで大学に奉職した若い音楽学者が中心となって買い集めた。収集にあたった学者が音楽史を専攻していたこともあって、それらの資料の中に19世紀以前に出版された基礎文献や、楽譜も含まれたが、この時に収集された文献が国立音楽大学の貴重資料の基礎となった。筆者は約20年にわたって貴重資料の整理にかかわってきたが、全般について述べたのはこの発表が最初である。

書籍については、“*Collection of Books on Music before 1850*”として2000年代にネット公開されている。<http://www.lib.kunitachi.ac.jp/collection/toku/yosho/top.asp>

ベートーヴェン・コレクション

1983年にボンのベートーヴェン・アルヒーフの研究員だった児島新氏から159点のベートーヴェンの生前出版の楽譜の寄贈を受けた。加えて1986年と1989年に文部省の助成金によって購入されたのが、ベートーヴェンに関する大型コレクションで、ベートーヴェンの楽譜は全部で1,303点に達した。

目録作成は1983年に出版された“*Katalog der Sammlung Anthony van Hoboken in der Musiksammlung der österreichischen Nationalbibliothek*”を基に、多少変更を加えておこなった。現在ベートーヴェンの楽譜は1,401点に達す。19世紀以前の出版楽譜は出版年の記述がないが、より正確な出版年を導き出すべく努力をした。このベートーヴェンコレクションは世界で3番目あるいは4番目に大きなコレクションである。1,303冊については2002年にネットで公開されている。<http://www.ri.kunitachi.ac.jp/lvb/cat/cat.html>

コレクションの特徴は、1. Original edition (74点)と、Re-issue of the original edition (137点)が多い、2. ベートーヴェンの生前出版が多い(137点)、3. 編曲物が多い(386点)、4. 恐らくハスリンガーの全集が世界で一番揃っている(161点)、5. イギリス出版が少ない、6. 同一曲、同一出版社の楽譜の中でさまざまな差異がみられる、という6点に集約できるだろう。(ref. 拙稿「ベートーヴェンの初期印刷楽譜にみられる書誌的証拠としてのウォーターマーク」、『国立音楽大学音楽研究所年報』13, 1999, pp. 51-73. 拙稿“Features of early printed editions of the works of Beethoven at the Kunitachi College of Music Library.” *Fontes Artis Musicae*, 50 (2-4), 2003. pp. 89-105. 拙稿「ベートーヴェン初期楽譜の諸相―プレートの問題」、『国立音楽大学音楽研究所年報』16, 2003, pp.163-180. 『国立音楽大学附属図書館所蔵貴重書解題目録』, 2006, pp. 40-41)

ベートーヴェン以外の貴重書

1990年に作られた目録データをコンピュータに入れなおし、その後に買い足された資料を加えて2,552点を新たに作り直した。出版年代は1580年のガルダーノ出版のポルタ作曲52曲のモテトゥス集 (ref. 『国立音楽大学附属図書館所蔵貴重書解題目録』, 2006, pp. 8-9) から20世紀初頭のシュトラウスの歌曲までに達する。16世紀出版1点、17世紀出版35点、18世紀出版726点、19世紀前半1,145点、19世紀後半575点、それ以降70点である。作曲家別ではモーツァルト(203点)がベートーヴェンに続いて多いが、様々な版が入り乱れており、コレクションとしての価値はあまり高くはない。規模は小さ

いながら、初版がそろっているのがシューマンとブラームスの楽譜である。(ref. 拙稿「楽譜の意匠—おしゃれな楽譜たち」, 『ばるらんど』261号, 2008, pp. 6-7)

分野別ではオペラが最も多く、636 点所蔵しているが、そのうち 243 点がパリ出版である。リュリのベレロフォン (1679) からマスネのクレオパトル (1915) まで、多様なフランスオペラの楽譜が並ぶ。記述はおおむねベートーヴェン目録に従った。著名人の所蔵だった楽譜として、ピアニストのコルトー所蔵の 2 点の楽譜、作曲家のダンディの書き込みのあるオペラスコアやサン＝サーンス所蔵の自作オペラ等がある。作曲家や前所有者が記したサインや文章はできる限り転写した。マスネは自分の名前だけでなく、相手の名前や短い献辞、それに時にはオペラのアリアからの一節を添えた楽譜を残しているが、そのうち 5 冊を所蔵している。その他レハール、グレトリ、V. マッセ、A. メサジェの献呈辞入り楽譜もある。(ref. 拙稿「ダンディ、マスネ、そしてピカソの署名入り本」, 『ばるらんど』274号, 2009, pp. 8)

自筆譜と筆写譜

自筆譜

4 点の自筆譜と 2 点の手紙を所蔵している。ベッリーニのノルマの 2 葉、ボンキエッリの初期オペラの 2 つのヴァージョン、ロッシーニの男声二重唱、スポンティーニのタントム・エルゴ、そして、ベルリオーズとサティの手紙である。自筆資料は、真に自筆かどうかの問題になる。ベッリーニの楽譜には証拠となる書類が添付してあった。ボンキエッリとロッシーニはそれぞれ、イタリアの専門家とコンタクトを取り、判断を仰いだ。ボンキエッリの *Il sindaco babbeo* は現在出版されている

作品目録では「消失」となっており、また、ロッシーニの作品は、*New Grove* の作品表ではパリの個人所蔵となっていた。唯一筆者が判断したのはスポンティーニの作品である。表紙に *Originale* の字があり、字体が作曲家のものと同じしたため、自筆譜とした。ベルリオーズとサティの手紙については購入時の書類が残っていた。(ref. 『国立音楽大学附属図書館所蔵貴重書解題目録』, 2006)

筆写譜

全部で 439 曲を所蔵。最も古いものは羊皮紙に記されたネウマ譜で、それぞれ 11, 12, 14 世紀である。(ref. 『国立音楽大学附属図書館所蔵貴重書解題目録』, 2006, pp. 4-5)

最も多い筆写譜は 18 世紀のイタリアオペラのスコア、ヴォーカルスコア、それにアリアである。この整理に RISM-A-II の電子データが大きな役割を果たした。整理の結果、1. 作曲者が判明した資料があった。2. アリアの歌いだししか分らなかった多くの曲のオペラの題名が判明した。3. さまざまなヴァージョンが見つかった。4. 扱った資料のほとんどは現代譜がない曲であった。

RISM-A-II の電子データの大半はインチピットが付いているが、インチピットつきの楽譜がレファレンス・ツールとしていかに有能かを改めて認識した。筆者は、この RISM-A-II のデータをタイトルページ等が紛失してしまった印刷譜の整理にも利用し、John doe であった楽譜の作曲者をいくつも突き止めた。(ref. 拙稿「身元を突き止めよ!」, 『ばるらんど』281号, pp. 4-5) この分野の主題目録はパイジェッロを除いて皆無に等しく、RISM-A-II のデータは主題目録の代わりとしての役割をも担ったのだった。

(はせがわ ゆみこ)



IAML Antwerp 2014

13-18 July

IAML 国際大会 2014 会議日程

Sunday, 13 July Opening reception

Monday, 14 July

Focus on the Archives of the Théâtre royal de la Monnaie

Big Data and music research

Conflict and culture: Research collections in libraries

Visualizing sound recordings

Music Instruments - museums, archives and metadata

Information literacy and music library

Tuesday, 15 July

Carillon, organ and saxophone - documenting history of musical instruments

Ephemeral and sheet music collection

Music & Social Media in Public Libraries

Developing music collections

Visual culture and music

New development in musical heritage policy

The Ways to deal with music archives: Three case studies on Belgian personalities

Discovering unknown music

Concert: Flemish Violin Music from Today and the past

Wednesday, 16 July

Tours

Antwerp

Museum Plantin Moretus (Unesco World Heritage), Hendrik Conscience Heritage Library, Vleeshuis (Music Instrument Museum, Sounds of the City): lecture-recital, Guided city tour

Brussels

Tour 1: Royal Library of Belgium, Royal Conservatory Brussels, Public Library, Atomium

Tour 2: Royal Conservatory Brussels, Royal Library of Belgium, Music Instruments Museum, Museum Fin-de-Siècle

Ghent

Library Conservatory of Gent, The Lamb of God (Van Eyck), Cathedral: organ concert. Brewery Gruut and performance of the music of the Gruuthuse Manuscript

Leuven

House of Polyphony (Alamire), Central Library of the Leuven University, Domus Brewery, Mechelen (carillon concert at the Royal Belgian Carillon School 'Jef Denyn')

Thursday, July 17

Belgian musical culture – connections

Music and children

Audio-visual collections and digitization in Belgium
Creating, promoting and interrogating electronic resources

Musical treasures in Belgian libraries

Bibliographical explorations

Concert: A Composer's Portrait: Luc Van Hove (1957-)

Friday, July 18

Crossing musical borders of cultures and societies

Wikipedia and the Web

Musical iconography

Catalogues, correspondence and C.P.E. Bach

Research projects in libraries

Archiving music in the 21st Century – providing access to cultural heritage

General Assembly with information session and closing session

Farewell dinner

<http://www.libraryconservatoryantwerp.be/iaml2014/>



事務局だより



2014 年度支部総会および第 56 回研究例会（予告）

6 月 8 日（日）、本年度支部総会が池袋・東京芸術劇場 6 階ミーティングルーム 5 に於て開かれます。本総会では先般実施された選挙結果の報告並びに新役員の紹介も行なわれます。また、総会に続いて研究例会が予定されています。会員多数の出席をお待ちしております。当日の次第は下記の通り。

総会 13:30 ～ 15:00

1. 2013 年度活動報告・決算
2. 2014 年度活動計画・予算
3. 役員選挙結果および新役員紹介
4. その他

第 56 回研究例会『音楽博物館』を考える 15:15 ～ 17:00

- ・上妻重之「民音音楽博物館の 10 年」（仮題）
- ・山田晴通「音楽博物館の存立基盤を探る — ポピュラー音楽系小規模展示施設の日米比較から」

アントワープ国際大会

本年度 IAML 国際大会はベルギーのアントワープで開催される。会期は 7 月 13 日（日）より 18 日（金）まで（p.13 参照）。今大会では山田晴通氏とベルギー在住の松江万里子氏による発表がある。

- ・松江万里子 "An "openly hidden" musical instrument: the carillon as a representative musical heritage of the Low Countries, its history, tradition and characteristic features" (15 日)
- ・山田晴通 "Displaying popular music: a comparative study on small-scale museums in the US and Japan" (18 日)

国際会議「個人蒐集家による音楽コレクション」

昨年 11 月 14 日より 16 日まで、パリ近郊のロワイヨモン修道院で「個人蒐集家による音楽コレクション」に関する会議が開かれた。報告はメルセンヌやバーニーから現在のラモー蒐集家まで広い範囲にわたった。日本からは関根敏子氏が出席、南葵音楽文庫の歴史と現状について報告した。会議録は近日刊行予定。

南葵音楽文庫資料、読売日響サイトでも紹介

「南葵音楽文庫」資料は、慶應義塾大学デジタルメディア・コンテンツ統合研究センター（DMC）によりデジタル化が進められ、同センターのサイトで公開されてきたが（<http://note.dmc.keio.ac.jp/music-library/nanki/>）、本年 5 月より、所蔵者である読売日本交響楽団の公式サイトでも、一般向けに紹介されることになった。（<http://yomikyo.or.jp/nanki/>）

読売日本交響楽団は、2012 年春の公益財団法人化にともない、公益事業として、「交響管弦楽の演奏」とともに「南葵音楽文庫コレクションの保存及び公開」を掲げ、法人としての取り組みを明確に定めた。

今回のウェブ公開はその一環であり、デジタル化の継続を「芸術資源マネジメント研究所」に委託、準備がすすめられてきた。（経緯については、美山良夫「南葵音楽文庫貴重資料デジタル化 — 現状と公開に向けて」本誌 48 号（2013.9）参照）。

画像（カラー）は鮮明で、個々の楽譜に付された詳細な解説とともに、徳川頼貞やカミングズ・コレクションの来歴など、「南葵音楽文庫」をめぐる歴史的背景についても懇切に紹介されている。

国立国会図書館「音楽資料・情報担当者セミナー」

国立国会図書館では、2010 年度より図書館、博物館、資料館の職員などを対象に、音楽資料・情報に関する知識および技術の向上に資することを目的として、「音楽資料・情報担当者セミナー」を開催している。2013 年度のテーマは「音声・映像記録メディアの現状と課題、今後の展望」で、昨年 9 月 6 日に開催された。講師と演題は次の通り。

- ・畑陽一郎「音楽流通の現状と課題」
- ・児玉優子「音声・映像記録メディアの取扱いと保存」（詳細は『国立国会図書館月報』637 号（2014.4）参照）

Newsletter — 国際音楽資料情報協会日本支部
第 50 号

2014 年 5 月 25 日発行

国際音楽資料情報協会 (IAML) 日本支部
〒171-8540 東京都豊島区南池袋 3-4-5
東京音楽大学付属図書館内
<http://www.iaml.jp>